

たぎちょう
滝町古窯

所在地 岡崎市滝町
(北緯34度59分4秒 東経137度12分1秒)

調査理由 急傾斜地崩壊対策事業

調査期間 平成20年4～9月

調査面積 400㎡

担当者 池本正明・武部真木



調査地点(1/2.5万「岡崎」)

調査の経緯と経過 急傾斜地崩壊対策事業に伴う事前調査として、愛知県建設部砂防課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け調査を行った。調査面積は400㎡である。

立地と環境 遺跡は岡崎市の北東部の滝町に所在する。調査地点は、西流する青木川の北側の丘陵、標高50m前後の西向き斜面に立地する。付近の谷筋を青木川に沿って岡崎から豊田市下山方面へ通じる道は大沼街道とも呼ばれる。滝町に残る古刹「瀧山寺」は役行者が創建との縁起をもち、江戸時代には東照宮が造営され興隆を極めた。遺跡はこの瀧山寺と三門の間に位置している。

調査の概要 調査前現況は石垣がめぐる3段の平場と墓地への道として利用されており、周辺で窯道具、窯壁片などが多数採集されていた。窯跡の存在が想定されたが、南側斜面は基盤岩盤が露出するなど傾斜地を大きく改変した状況から、窯体はほぼ滅失しているとの認識であった。調査の結果、近世磁器窯の物原と石垣で囲われた内側に窯体1基を確認した。

主な遺構 窯体は西向きに開口する横室型・縦狭間構造をもつ連房式登窯であり、石垣構築の際に破壊された部分を除き、焚口・胴木間・焼成室の床面を検出した。後方煙出付近は削平されているが、確認された規模は全長11.0m、最大幅は4.1mあり、焚口と焼成室最上段床面との比高差は約4mである。焚口は閉塞の状態を検出し、胴木間の床面上方の傾斜は25度、最大幅は約2mである。続く第1房は奥行が0.4mであり捨て間の可能性が考えられる。これを含め床面は少なくとも7室を検出した。敷地周囲の地形上の制約などから、窯体は焚口・胴木間・捨て間・焼成室(7室)・煙出(未検出)の構成かと推定される。狭間柱の上部付近が比較的良好に残る部分があり、窯体の構築部材や構造についても多くの情報が得られることとなった。

出土遺物 物原は窯体の向かって左側、北西側に広がる。調査範囲の制約もあり、物原堆積層は検出面から約2mの深さまでを確認した。主に窯道具類からなり、匣鉢・トチ・エブタ・ニギリ・クレ・棚板(?)・狭間柱材・窯壁などがある。窯道具と比較して製品の割合は極端に低く、磁器端反碗、広東碗の焼成不良品と色見片のほか、少量の陶器(急須、行平)があるのみである。19世第2四半期頃から幕末までの間に操業したと考えられる。その他注目される資料として刻書、刻画のある窯道具類があり、円形凸底匣鉢の底部外面に「栗田」と刻まれたもの(2点)、人物の顔(2)、草花と脇に「月方面」(3)、「栗田」、家紋(1b)と片面に「東叡山 青龍院内 栗田源二郎 源盛方」(1a)と刻まれた円形のエブタなどがある。

東叡山は天台宗上野寛永寺の山号であり、その塔頭の一つに「青龍院」の名がみえる。江戸時代前期の瀧山寺の住職亮盛は寛永寺開山天海の弟子であり、この青龍院の住職をも兼任したという。発見された窯体は近世後期の窯業生産を考える上で貴重な資料であり、また成立・経営に寺院の関与が想定される特殊な事例となった。(武部真木)



窠体後方(手前)と滝仁王門



窠体部分 全景



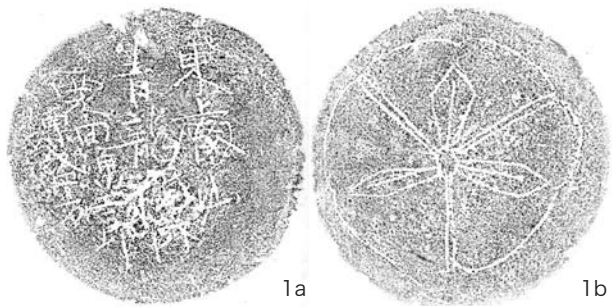
側方からみた狭間柱上部と狭間孔付近



狭間柱と狭間孔

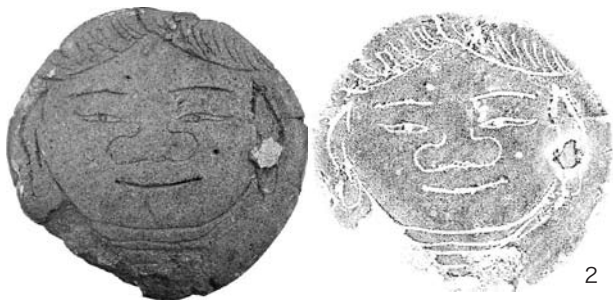


物原の断面



1a

1b



2



3



拓本 1:3